

巻頭言

東京医科大学病院漢方医学センターのご紹介

東京医科大学病院  
漢方医学センター 及川 哲郎

東京医科大学病院は1931年、東京の新都心である新宿にほど近く、現在は超高層ビルが林立するエリアの一角に変貌している淀橋(現・新宿区西新宿)に、大学付属淀橋診療所として開設されました。開設の母体となつた東京医科大学の開学は1916年ですが、その設立経緯は興味深いもので、当時の日本医学専門学校(現・日本医科大学)で学んでいた学生が専門学校の執行部と対立・退学し、自分たちの理想とする医学校作りを目指して建学したということです。学生がみずから設立した大学ということもあり、その建学の精神は「自主自学」として今に受け継がれています。私自身こちらに着任して、東京医科大学の学風は自由闊達で、(自分で言うのも何ですが)漢方のような「新奇」なものであつても興味を持つて受け入れる土壌があると感じます。

そのような東京医科大学病院に漢方外来が出来たのは2007年のことでした。長年私が懇意にさせていただき、現在は漢方医学センターの同僚でもある、本学OB矢数芳英先生が中心となり、これまでの東京医科大学に足りなかつた医学・医療である漢方を少しずつ発展させてきました。後日の機会に改めてご紹介しますが、矢数先生は大学病院医師を主たる対象とした臨床漢方セミナーなどの啓発活動も地道に展開され、元々新しいものに対しても寛容な東京医科大学の学風の中、本学における漢方の認知度向上が徐々に図られてきました。

そうした経緯の中で、開学100年を迎えた東京医科大学の記念プロジェクトとして新大学病院が竣工しました。そして東京医科大学病院漢方医学センターは、患者様の一層の症状改善、生活の質向上を目指すため、2019年7月の東京医科大学病院新病院開院に合わせて、これまでの漢方外来を拡大・改組(センター化)する形で総合診療科内に新規開設されました。現代医学的な視点と異なる漢方医学の診断や治療の特長を十分に生かし、患者様のお役に立てるようスタッフ一同鋭意診療にあたっています。同時に、本学のあらゆるレベルにおける漢方医学教育や研究業務にも積極的に取り組んでいます。現在のスタッフは、センター長を及川(総合診療科)



東京医科大学新大学病院外観(青梅街道側)

が務め、矢数芳英(麻酔科)、渡邊秀裕(感染症科)、伊藤正裕(人体構造学分野)の計4名で運営しています。現代医学におけるそれぞれの専門分野の上にさらに漢方医学を研修、全員が漢方専門医の資格を持つ漢方医学のエキスパートです。

漢方医学センターは、東京医科大学病院通院中の患者様を中心に、漢方治療の併用でさらに症状や体調を改善していただくことを第一の使命としています。その意味で、安心して漢方治療を受けていただくため現代医学的検査を十分に行い、正確な診断を行うことも重視して

ます。総合診療科をはじめとした診療各科との連携がよいこと(そもそも漢方医学センターは総合診療科内に開設され、私も診療を中心に研修医教育や医学部学生教育などの総合診療科業務を担当していま

す)は、漢方医学センターとしても大きなメリットとなっております。大学病院にふさわしいレベルの漢方医療・統合医療とはなにか。そのことを常に考えながら実践・工夫を重ね、患者様により良い治療効果が発揮されるよう、日々精進していきたいと考えています。

また東京医科大学は、矢数道明先生を筆頭として多くの漢方医家を輩出した、言ってみれば漢方の「名門」大学でもあります。そういった意味で、漢方医学センターの今後の活動を通して、新しい時代に漢方医学を受け継ぎ実践・発展させていく若い力を育てることも十分意を注ぎたいと思っています。

有難いことに、新年からは本誌での連載の機会も頂けることになりました。「温故知新 東京医大漢方医学センターだより」と題して、我々の日々の活動の様子をリアルタイムにお伝えできればと考えています。

コロナに始まりコロナに終わる感の強かつた大変な2020年も残すところわずかとなりました。末筆ながら、皆様にとつて来る2021年が素晴らしい1年となりますよう心より祈念しております。今後とも皆様のご指導ご鞭撻をいただけますよう、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(医師：〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1)